

二十、感謝

また年の暮が近寄る。私は今、岡山や大阪に帰る同志、それに岡本法幢氏とともに、福山への汽車に乗っている。昭和十年の回顧、それはただ、感謝の二文字につきる。

光明団創立より十七年、その間には、いろいろな歳月を送ってきたが、本年ほどありがたい年の暮を迎えたことはなかった。何ゆえに私はかくも感謝をもつて本年を送らねばならないであろうか。それはまず何よりも第一に本部内の現状である。

愚弟啓三が、脊椎カリエスのためにまったく病床の人となり、昨年夏頃は幾度も重態となり、死線を彷徨した。彼が病氣となつてくれたことは残念なことではあった。しかし今ではすでに闘病よろしきを得て、床の中にはするが、まったく食いともてしまったことは、私にとつては限りなくうれしいことである。それよりもつとうれしくありがたいことは、彼がまったく念仏の行者となつてくれたことである。この頃の彼はまったく変わった。我慢から礼拝の敬虔へ、硬直から柔軟へ、哲学から宗教へ、理論闘争から念仏へ、一人の人間が念仏行者へと救われてゆく、そのすべての諸相を模範型に示しつつ、彼は合掌念仏の子となつてくれた。ああ。念仏は変わりきることであつた。知りきることであつた。思惟の極致であつた。己に還る道であつた。命捨いした子は、もつと大きな寿命に摂取された。人に聞かせる子が聞く子に変わった。闇の中心であつた彼は、光の中心となつてくれた。長い間私の胸中に垂れこめていた重い荷物は、「兄さん長い間淋しかったろう」と泣いて念仏する子を見出した時、その重いものは静かに溶けていった。この上はただ、仰ぎ願くば、もし彼が仏天の御冥見に叶うならば、起つ日のあれよかしと念ぜざるを得ない。

印刷の佐々木君も、ご本人にとつてはじつに一生の大問題のあつた年ではあつたが、その事件は同君をして内的行歩をして最後の一線を突破せしめ、一転再転、金剛の安住処へと落居せしめた。異体同心、同心一如、私が念仏とともにペンを走らせ、同君が念仏とともに活字を組んでくれる。私は完全に、尊ぶべき終生の片腕をここにも与えられた。かつて自己を偽ることなき君が、心臓を久遠の真実によつて貫かれた本年は、君にとつてもまた終生の記念塔の打ち建てられた、尊くも感謝さるべき年であつた。ここにもまた、私をして感謝措く能わざるの年の暮を成就してくれた大きな因がある。

今も己斐駅には、一行の荷物を運んで来た越堂君があつた。いぎ大会ともなれば一日に何回でも自転車飛ばし、一切の雑務のすべてを足も軽く動いてくれる同君である。君もまた本部に来てから一年、変わったものである。今学院に通っているが、合掌して聞き、念仏して求め、そして働く人である。必ずこの道に大きく育つ日のあることを信ずる。

鳴井いし、藤井なみ子、佐々木智慧子の三女性は、家内を助け、炊事に、看病に、製本に、いずれもよく働いてくれる。それにみな熱心な念仏求道の子である。朝四時半には起き上っている鳴井さんが動いている処、念仏の声が聞こえてくる。聖講八十人のまかないも、これら三四人の手で立派にやつてのけた。

旅から帰ると、忙しい私の部屋におしかけては、臨時座談会が開かれる。私にとつては仕事の邪魔ではあるが、うれしいありがたい邪魔である。

かくして本部は完全に念仏の行者をもつて固められた。お念仏の声の中にすべてが一つに動かされてゆく。私は旅にいても、本部が、あの美しく荘厳された御本尊殿とともに、御本尊を中心に皆が私の背後から護りつづけてくれる。

旅にいて、静かに念仏する時、本部は六字そのものとなつて、私の憶念の内容となつてくれる。四十一年の暮、過去十七年の貧しき念仏の行歩に与えられた最大の賜である。しこうして何を恵まれたよりもありがたいことである。

わが光明団は、大衆へ拡大への歩みを、十五周年記念聖講から急角度に転じて内へ内へ深く深く「二人か三人かでいい。」という、消極的な歩みにしてしまつた。そしてそれは、本年に至つていよいよ強化された。一月の本部と河内、三月の福山、五月の筒賀、六月の本部、八月の本部と島根、十二月の本部、戸河内、聖講習だけでも九回、長きは十五日、一週間、短くても四日間の講習会が開かれた。真剣なる同胞たちは、この激しい訓練と聞法修行に堪えつつ、しかも喜んだ。

こうした団の歩みは、一切の歩みを純化した。不純分の夾雑を許さなかつた。深化とは純化であり、淳化であつた。一つの成算しきれないものを持つたもの、いいかげんな歩みをする者、等々を一切排除して、そのかわりに新しく、もつと純粹な、真剣な深い歩みをする同胞を誕生せしめた。

われらは今確かに新しい出発点に立つている。われらにとつての唯一の根本精神は、量の獲得よりも質の純化である。大法の命ずるままに、一切の誤謬と歪曲を正しつつ、清浄真実の一道を歩みきることである。鋼鉄の機関車は、いずれの村、いずれの町にも生れねばならない。大衆には幸福が約束されねばならない。しかしわが団員には、正しい強い純粹な歩みが約束されねばならない。特に中堅的位置にある人には、念仏精進自行化他のためには、飢餓すら約束されねばならない。大法のために死を肯定したものの前にのみ、大法の絶対に人を殺さぬことを知るであろう。

われは君を知る。大法の前に合掌して一点の私心なく、死すら覚悟して、仏恩にかされる君を知る。大法は心の食なり。一滴一粒を粗末にすべからず。招喚の勅命は絶対なり。世間生死の雑音とまがうべからず。痴人と言われるも可なり、愚者と嘲笑されるもまた可なり、愚は愚これを買ひ、賢は賢これを買ひ、悪は悪これを買ひ、真実は真実これを買ひ。真実一道の堅持、必ずこれを拝するの人生生ず。しこうして

今や、君においてこれを見る。妥協絶対に廃すべし。硬直自慢取るべからず。肅々たる一道精進の行歩、如来の御冥見に叶うがゆえに必ず光る。

一人の陶器師があつた。茶器や花瓶等の芸術品を造っているのであるが、何年たつても、その作品には、高き気品もなく、風格もなく、いつまでたつてもあまり進歩がない。一人の忠告者があつて、「君は、君の作品中、快心の作だけ残して、ほかの下手いものはすべて壊したらどうか。」と言われると、「それでは飯が食えません。」と言つた。この男は、終生飯を食うに困るであろう。そして過去に水を飲み、粥をすすつて、芸術に精進したことのある人の作品が五円で売れている日、その男のものは三十銭にも売れないであろう。宗教家などもまたかくのごとし。されど他日を高く売らんとするもなお不純である。一生飢餓をも厭わず、ただただ仏道に精進すべし。

褒められて逃げたものは一人もない。まことに一人もない。

苦い忠言を与えたがために去つた人はあまりにも多い。

しかしその苦い忠言を領解して、大いなる飛躍をとげた人は、それよりもつともつと多い。

その領解者は資け、逃げたものは石をなげる。その石こそ、私の領解すべき私の短所であり、不徳である。

正信の大機たることはきわめて容易であつて、きわめて困難である。世の智者よ。カニの横ばいを倣つて、不信劣智の人となることなかれ。その差はただ、絶対に合掌して、聞、信、称の三即一なる、唯一一道を歩むか否かにあり。自己を徹底的に精算しきらず、その胸中に一点の名利心、我慢心が不知不識の間にもを言わんか、大法は遠くこの人を去つて、そこにあさましき売談屋、虫熟れ同行が高慢にも横たわつてゐるに至るであろう。

今年もまた、私の不徳ゆえに、私を去りゆく人の多かつたことを慚愧せずにはいられない。まことに悲しいことである。去りゆく人は意気揚々たるものがあるかも知れないが、去る人をよびとめられもせず、念仏して送らねばならぬ者の心は寂しい。

年の暮れは、私を深い内省へとつれて行く、厳粛なものが私に迫ってくる。全我を托せる一つの軌道は、底深き喜びそのものではあるが、それはそのまま大いなる悲しみ、幾年続く底なき悲しみ深化でもある。またしても真実教の言々句々が、念仏となつて深刻に私の魂に食い入る。不可説なる斯境を感謝と呼ぶか。